

2025年8月3日 第二礼拝

説教題「砕かれ、受けて、歩む」使徒言行録7章51節～8章1節

主任牧師 加藤 誠

「人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、『主イエスよ、わたしの霊を受けてください』と言った」(使徒言行録7:59)

使徒言行録には「イエスの名で語るな！」と厳しく脅かされながらも、聖霊の励ましを受けてイエス・キリストの救いを語り続けた使徒たちが次々に起こされていきます。ステファノはその一人でした。ステファノは「イエスの名」のゆえに逮捕されて最高法院で堂々と証しをしますが、そのために人々の激しい怒りを受けます。

54節「人々はこれを聞いて激しく怒り、ステファノに向かって歯ぎしりした」。57節「人々は大声で叫びながら耳を手でふさぎ、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、都の外に引きずり出して石を投げ始めた」。

このステファノの殉教の場面を読むと悲しく、心がつぶれそうになります。人間はここまで残忍に、また凶暴になれるのか。創世記で神は「我々に似せて人を造ろう」と愛の息吹を吹き込んで人を造ってくださったのに、このステファノに襲いかかる人々の姿に「神の似姿」を見出すことはできません。

ガザの惨状を伝えるニュースが重なります。子どもだけでなく、大人も医師たちも餓死に追い込まれているのに、それでもなおミサイルを撃ち込むことをやめない。こんな残忍な行為を正当化できる「正義」とは何なのでしょう。

今朝のこのステファノの殉教の場面で「耳をふさぐ」という言葉が心にとまりました。人々は自分たちの罪を鋭く指摘するステファノの言葉に「耳をふさぐ」のです。さらにステファノが天を見上げてイエスを賛美する言葉を「聞くに堪えない」と「耳をふさぐ」のです。しかし「耳をふさがないと成り立たない正義」は、ほんとうの正義と言えるのでしょうか。「ほんとうの正義」は、どんな批判にも耐えうるものではないのでしょうか。例えばイエス・キリストが十字架で成し遂げられた「正義」。それはどんなに嘲笑われても、唾を吐きかけられても、びくともしない「正義」です。

イスラエルの軍事侵攻を正当化する「シオニズム」という思想があります。簡単に言うと「ガザは神様がイスラエルに与えると約束された土地であり、パレスチナの人々が住むべき場所ではない」という考えです。クリスチャンの中にも「聖書に書かれていることは一言一句間違いはない」と言ってイスラエルを支持する人がいますが、不思議なのは「聖書の言葉は一言一句正しい」と言いながら「あなたの敵を愛しなさい」「剣を取る者は剣で滅びる」という主イエスの言葉には「耳をふさい」でいる点です。一方でユダヤ教の方の中には「神の正義は人間が軍事力で実現すべきものではない。人間は神の正義の前にへりくだらなければならない」と語る方がいます。大切なこと

は「神さま、あなたの正義が実現しますように」と神の前に心を開いて、へりくだり祈ることであって、人間が神の正義の実現者になろうと力んではいけないのです。

ステファノの場面に戻ると、「耳をふさいで」自己正当化の罪に突き進む人々を前に、ステファノは十字架の主イエスそのままを生きています。59 節「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」という言葉は「父よ、わたしの霊をお受けください」という十字架の言葉と重なりますし、60 節「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」という祈りも十字架の主の祈りそのままです。ステファノはこの場面で、一人ではない。人々の怒りと憎悪を一人で受けているのではない。十字架の主イエスがステファノの中に生きていて、その主イエスと共に受けているのです。

さて、この現場にサウロ（のちのパウロ）が居ました。パウロはイエスに従う弟子たちを迫害することに賛成していました。ここでは直接ステファノに石を投げてはいませんが、率先して主イエスの弟子たちを迫害する先頭に立っていたのです。後にパウロが自らの回心を語るときに、このステファノの殉教の現場に自分がいたことを正直に語っています。パウロにとっては、その心に棘のように刺さって抜けない、思い起こすたびに胸が痛む出来事だったことでしょう。ステファノが絶命する前に主イエスに向けてささげた祈りがその耳に残って消えなかったことでしょう。アウグスティヌスは「ステファノの祈りがなければ、使徒パウロは誕生しなかった」と語っています。ステファノが命を不条理な暴力に奪われていく殉教の現場に主イエスは共におられ、その悲劇を通して神は一人の信仰を起こしていくのです。ここに「神のところが」の出来事が起こされています。「人にはできないが、神にはできる。神は何でもできるからだ」。主イエスの十字架を通して弟子たちに信仰が注がれたように、ステファノの殉教を通してパウロに命の御言葉の種が植えられたのでした。

パウロは後にガラテヤ書 5 章でこう語っています。22～23 節「霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です」、25 節「わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう」。

自己中心的な私たちは、聖霊の導きをいただくことなしに、誰かを愛することはできませんし、喜びや平和をもたらすことはできません。聖霊の導きとは、第一に十字架における罪の砕きです。都合の悪いことに耳をふさいでいる私のかたくなな自己中心が砕かれて小さくされることです。ステファノが「あなたがたはいつも聖霊に逆らっています」（51 節）と人々の罪を鋭く指摘した言葉は「そのままわたしのことだ」と認めることです。そして聖霊の導きの二つ目は、心を神に向けて開かれ、へりくだり、神の愛の息吹を受けていくことです。聖霊は私たちの罪を厳しく示しますが、同時に私たちの心に神の愛と祈りを注ぎます。「砕かれ、受けて、歩む」。ここに十字架の主に従う信仰が示されているのです。